

現代方言における「こおろぎ」と「きりぎりす」

真田 信治

はじめに——語の逆転

古典に描かれているキリギリスが、今日の「こおろぎ」のことであることは周知の事実である。例えば『枕草子』には「九月つごもり、十月ついたちのほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの声」とある。旧暦での十月上旬といえども立冬の頃である。また、『新古今集』には、かの名歌「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝ん」があるが、霜の降りるような寒い頃に「きりぎりす」が鳴くわけではない。鳴くとすれば、これは「こおろぎ」であろう、と言うことになる。この点をめぐっては、古く新井白石の考証があり、近くは橘正一の方言資料をも駆使した考察がある（注1）。特に、橘は方言におけるキリギリスとコーロギの逆転現象を援用して、古

語のキリギリスは今日の「こおろぎ」のことであり、一方、古語のコホロギは今日の「きりぎりす」のことであろうと推定している。

ところで、方言の世界での「こおろぎ」と「きりぎりす」の名称の分布の詳細についてはいまだ不明の部分も多い。

（因に、国立国語研究所編『日本言語地図』にも両項目は入っていない。）そこで、ここでは、現代の「こおろぎ」および「きりぎりす」の名称についての（近畿以东の東日本域の）分布実態を紹介しつつ、両者の辿った歴史について、言語地理学的観点からの検討を加えてみることにしたい。

なお、扱う資料は、佐藤喜代治先生、加藤正信先生をはじめとする、東北大学国語学研究室関係者その他が、「文献を資料とする語史研究との対比による言語地理学的方法の

検証」をテーマとして、文部省科学研究費（総合研究）の交付を受けて、昭和46・47の両年にわたって実施した通信調査（一部、臨地調査）での結果に基づいていることを明らかにしておきたい。この調査での対象地点は約八五〇。対象としたのは各地点の老年層の使用語である。質問文は、次の通り。

- 夏の終りから秋に鳴く黒っぽい虫（「こおろぎ」）を何と言うか。

- 夏に鳴く緑色の虫（「きりぎりす」）を何と言うか。

「こおろぎ」の方言分布

図1は「こおろぎ」の名称の分布図である。

まず、東北地方から新潟にかけての地域に連続して分布しているキリギリスの存在が注目されよう。新潟の一部に集中して分布するキリギリスも同類と認められる。キリギリスはまた長野、千葉などにも点在する。このように地をへだてた広い領域でキリギリスが分布域を持っている以上、これらは誤解などによって生じた単なる地域的な現象とは言えないであろう。橘が指摘したように、これは中央日本（京都）におけるいにしえの姿をそのままにとめているもの、と解

するのが妥当のようである。

ところで、富山にはツズレサセという語形が見られ、興味深い。この語形は、例えば『古今集』にある「秋風にはころびぬらし藤袴つづれさせてふきりぎりす鳴く」の歌のように古書において往々、キリギリスの鳴き声として描かれる形に直接繋がるものである。この点からも、古典に描かれるキリギリスが「こおろぎ」のことであることが証明される。

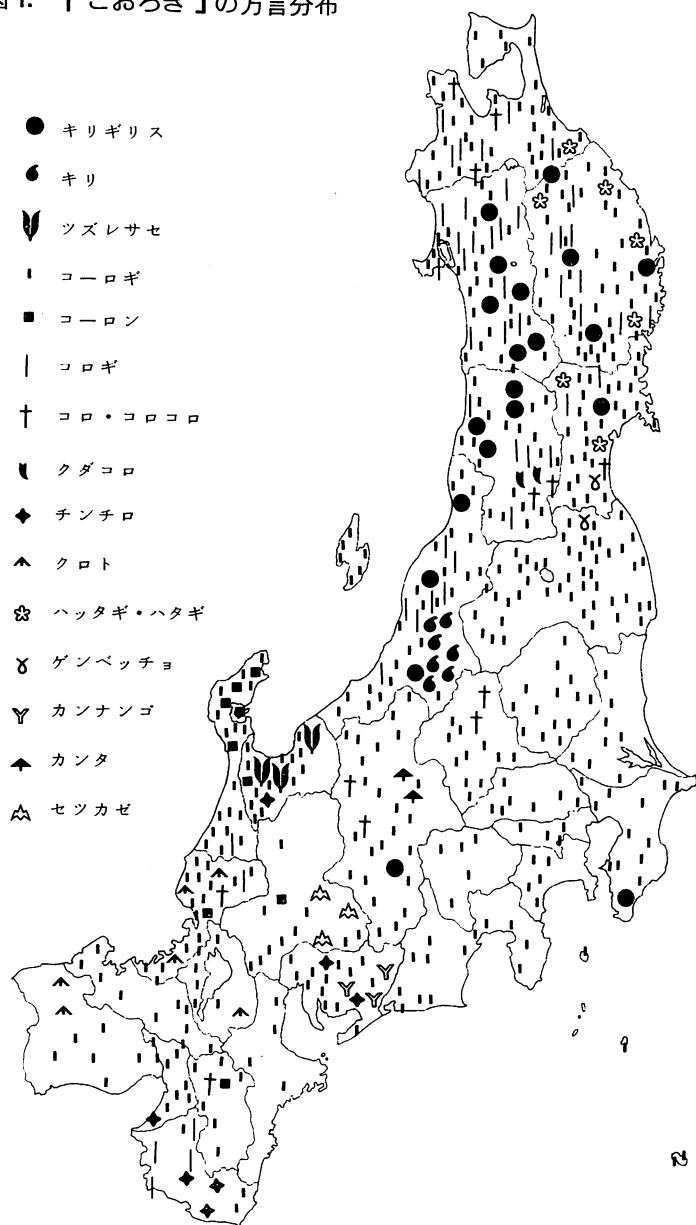
今日、標準語形コロギは広く全国に分布する。北陸にコロロンという形があるが、これは、次のようなプロセス、すなわち語末母音の脱落によってできた形と考えられる。

korogi —→ koron

また、東北、近畿などには、コロギという形が分布しているが、いずれも長音の短呼される傾向を持つ方言地域であることから、やはりコロギの变化形と考えたい。コロギのコロは地点によつては「こおろぎ」の鳴き声に拠るものと意識されているが、そのこともこの変化をうながしたかもしれない。図1によれば、コロギの分布地点周辺にコロ（コロコロ）といった語形が散在している。

一方、やはり鳴き声からきたと思われるチンチロや、ま

図1. 「こおろぎ」の方言分布



た、体の色からきたと思われるクロトという語形が、近畿およびその周辺部に分布していることも注目される。分布の状況は、これらの語形が、ある時期、上方を中核として拡大したことを推測させるものである。

なお、東北地方の太平洋側に点在するハツタギ（ハタギ）は、地点によつては「いなご」や「ばった」などを表す語形である（注2）。この語形の由来については次項に述べる。

「きりぎりす」の方言分布

図2は「きりぎりす」の名称の分布図である。

東北地方の広い地域にわたつてハタオリという語形が分布している。ハタオリは北陸、能登半島の先端部にも存在する。この語は、中央の古辞書に載せられている「きりぎりす」の古形である。平安時代の『和名抄』には、「促織ハタオリメ蜻蛉コホロキ蟋蟀キリ／＼ス」とあるが、この点について、新井白石は、次のように述べている。

古にハタオリメといひしものは、今俗にキリ／＼スといふ是也。古にコホロギといひしものは、今俗にイトドといふ是也。古にキリ／＼スといひしものは、今俗にコホロギといふ是也。（中略）ハタオリメとは織機女也。（『東雅』）

なお、ここでのイトドとは、「こおろぎ」の一種、いわゆ

る「おかまこおろぎ」のことである。

ところで、図2によれば、ハタオリの分布域をおおうような形でコーロギが、東北から北陸にかけて分布していることが注目される。分布の状況から見ても、コーロギが過去のある時代、ハタオリに変わる「きりぎりす」の新しい名称として勢力を拡大した時期のあつたことがうかがわれる。岩手・宮城などに現われているハツタギ（ハタギ）はハタオリとコーロギとが混交してできた形であろう。ハツタギの成立にはさらにバツタという語形も関与したと考えられる。

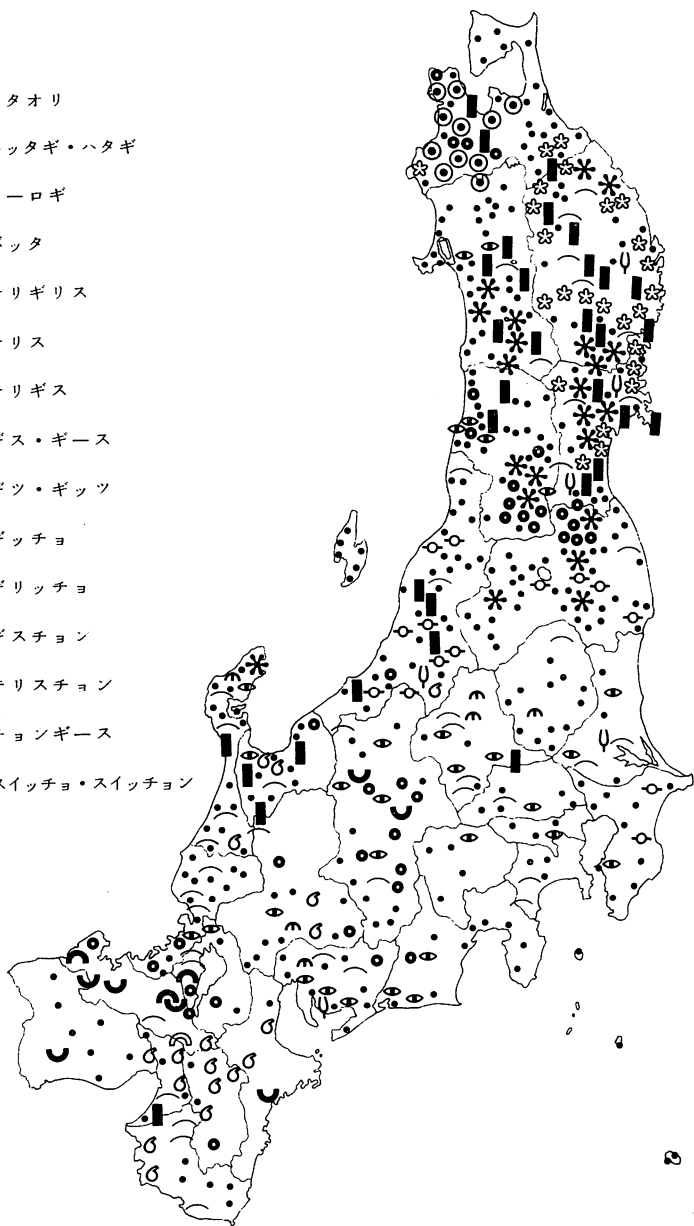
一方、キリギリスの類の語形としては、各地にさまざまなものがある。キリギリスの変化形と認められるキリスは、分布の状況から、ある時期、近畿を中心に拡がったもののようにある。福島、新潟、千葉などに点在するキリギスもキリギリスの変化形であろう。なお、ギス（ギース）という語形が各地に散在しているが、江戸時代の方言集『秋長夜話―続編』には、

広島の方言に、夏日草野叢棘の中に鳴羽虫を伎須（ギス）といふは、其声によりて名つけたるにはあらず。是幾里幾里須の訛なり

という記述が見える。青森ではこのギスがさらにギツ（ギ

図2. 「きりぎりす」の方言分布

- ✱ ハタオリ
- ☆ ハッタギ・ハタギ
- コーロギ
- り パッタ
- キリギリス
- キリス
- ◌ キリギス
- ギス・ギース
- ◎ ギツ・ギッツ
- ◌ ギッチョ
- ◌ ギリッチョ
- ◌ ギスチョン
- ◌ キリスチョン
- ◌ チョンギース
- （ スイッチョ・スイッチョン



ツツ)と変形したようである。また、ギツチョという語形も広い地域に分布している。京都の周辺部などにはギスチョン、チョンギースなどという語形が存在する。これらの語形の成立にはスイツチョ(スイツチョン)という語形も関与したと考えられる。

以上の考察をまとめて、「きりぎりす」の名称の展開を図示すると、下のようになる。

(注1) 橋正一「『きりぎりす』と『コホロギ』」(国語と国文学12
— 2 昭10、2)
(注2) 拙稿「東北地方における『いなご』と『ばった』の方言
分布とその解釈」(国語学研究12 昭48、3)

(国立国語研究所々員)
— 昭55・9受理 —

